

実社会との関わり重視

「課題対応力」を育成

(公財) パナソニック教育財団の特別研究指定校として、新潟県三条市立大島中学校(田中哲也校長、生徒81人)は、実社会との関わりを重視したキャリア教育に取り組んでいる。キーワードは「課題対応力」の育成。地域とのつながり(ひと・もの・こと)を大切に、「リアル感」(現実味)のある深い学びの実現を目指している。指導・助言を行う後藤康志・新潟大学准教授のコメントと合わせ、同校の取り組みを紹介する。

新潟・三条市立大島中学校

1カ月に必要な生活費を考える

「家賃15万って高くない?」「貯金はどうしよう?」

10年後の生活に必要なお金について考え、交流する生徒たち。お金の大切さを実感し、進路選択や職業を考えるきっかけにする3年生の学級活動の取り組みだ。授業はコンピュータ室で行い、一人一台パソコン

を使用。表計算ソフトを使い、1カ月の生活に必要な支出を考えてまとめた。実際、一人暮らしには、どの程度のお金が必要なのか。社会人になって間もないゲストティーチャーから、1カ月の生活のやりくりについて紹介してもらった。「1カ月の生活費を自由に考えたのは初めての取り組み」という山崎寛山教諭(研究主任)。「現実と向き合い、社会保険料や水道代など、細かい部分を知ることによって視野が広がった」とも話す。



ICT機器を使い、話し合いで考えをまとめていく生徒たち

働く・生きる・学ぶ 三つの視点踏まえ

今後、先行き不透明で予測困難な変化の激しい時代になるといわれる。そんな中、「全ての学習は子どもたちの将来のためである」と語る田中校長。「子どもたちに学ぶ目的や学ぶ意義をきちんと伝え、『学びに

向かう力』を高めたい」と考え、キャリア教育に着目した。田中校長が着任したのは2017(平成29)年度。それまでは道徳教育の研究を推進していた同校。全教育活動で取り組む道徳教育とキャリア教育。共通するのは「自立」と「生き方」の二つになる。何事も行動を起すには、適切な判断と、それに伴う道徳的価値観が欠かせない。そのため、道徳教育で育む「内面性」(道徳性)をベースとし、生徒が自ら考え、行動する「実行性」に関わる資力・能力をキャリア教育で育てようと考えた。内容としては①働くこと②生きること③学ぶことの三つに分

キャリア教育

ループ 生徒とゴールのイメージ共有

地元の商業高校の教員にアドバイスをもらおうと授業で遠隔通信Web会議を使用した後、子どもたちが「次も使いたい」と思えるかどうかを実現する上で、教師の意図が「深い学び」を

果が高まっているかを判断して「学び合い」を断る上でのバロメータ「情報収集・活用」「連携」の三つの視点

「深い学び」を本校では、学校教育全体でキャリア教育を推進している。その思いは、学習効果は欠かせない。その手

ICT機器を効果的に活用

キャリア教育の充実に向け、ICT機器を効果的に活用している。「人とかかわる力」に重点を置いた比

類。3年生の学級活動で実践したお金に関わる取り組みも、三つの視点を踏まえ、育てたい力については、将来につながる「課題対応力」を設定。「最後までやり抜く力」「自分を見つめる力」など、「課題対応力」を五つの資力・能力にして細分化した。こうした力を育む授業の工夫として、「学び合い」を取り入れている。「情報収集・活用」のツールとして遠隔通信「Web会議」を使用。「情報収集・活用」のツールとしても活用し、インターネットで情報を集めて商品企画書を作成した。こうしたICT機器の活用に関し、大島中



後藤康志・新潟大学准教授

ICT機器は、教師側から「与えている」だけでは意味がない。例えば、大島中学校の2年生は、総合的な学習の時間で郷土をPRする商品開発に取り組んでいる。その際、